

第4章 小串構内医学部基礎研究棟新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

医学部キャンパス南東部では、昭和58年度の図書館新営に伴う立会調査が行なわれているに過ぎず、その基礎資料は不十分であった。今年度に至って図書館北方の地域に基礎研究棟新営が計画されたため、埋蔵文化財資料館は、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施した。

新営計画は、旧臨床研究棟と旧図書館にまたがる地域に約1300㎡が予定されていたが、既設の建物、庭園をはじめ配管が密に埋設されているため、それらを回避し、旧図書館と園池間に3m×3.5mのトレンチを設定して調査を実施した。調査期間は昭和60年7月15日から7月17日までである。

なお、腐蝕土および構内造成時などの置土を含む表土は機械を使用して除去し、それ以下は人力による分層発掘を行なった。

2 層位

現地表面の標高は約1.70mで、約140～150cmの厚さをもつ腐蝕土および構内造成時等の置土を含む表土下位に旧耕作土が残存する。旧耕作土下には厚さ約40cmの赤褐色粘質土の客土が認められる。この客土は同キャンパスでは検出しておらず、かつまた比較的硬質であることから、未調査地域であるキャンパス中央部付近に埋存していると思われる低丘陵の削平による置土と考えられる。その下位、標高約-0.20mで二次堆積層である青黄灰色粘質土、さらに暗青灰色粘質土が堆積しているが、地山は確認していない。

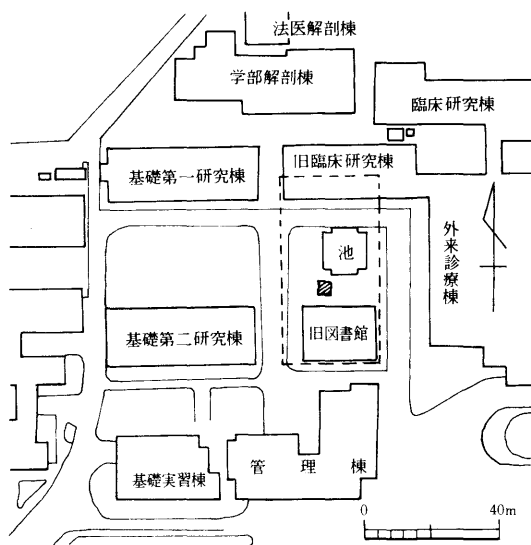


Fig. 26 調査区位置図

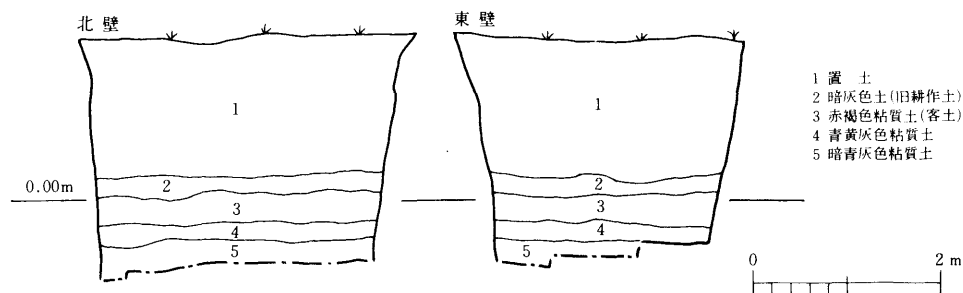


Fig. 27 土層断面図

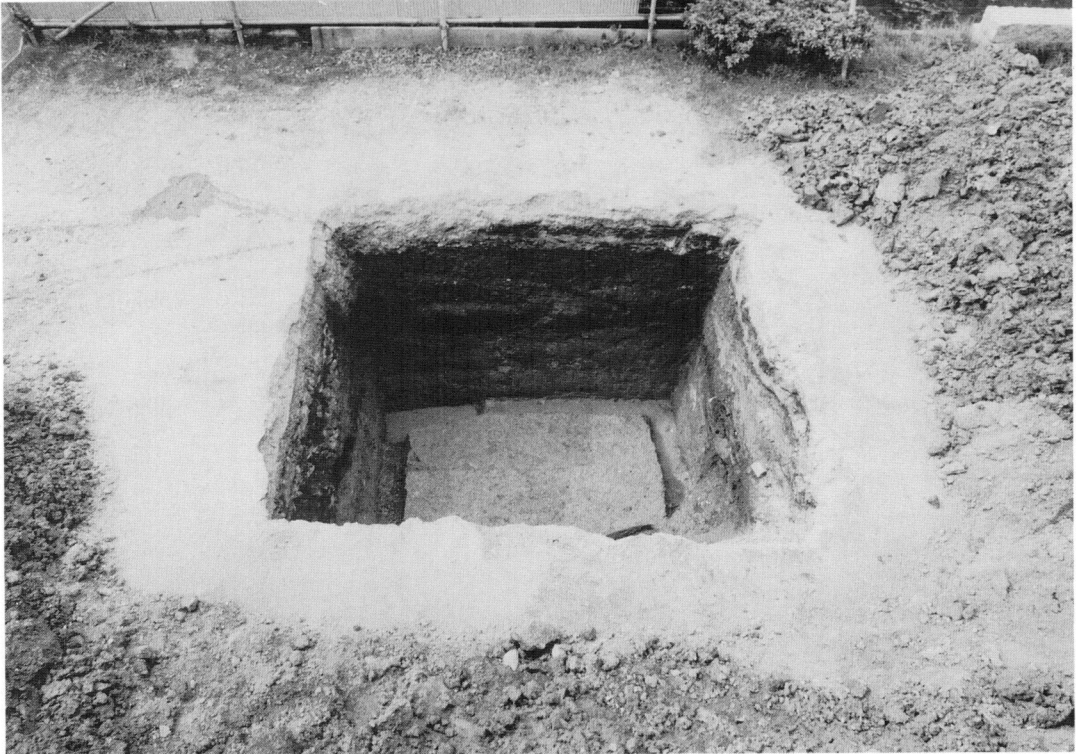
なお青黄灰色粘質土には、周辺からの流れ込みによるものと推察される近世の陶器片若干を包含していたが、他に顕著な遺構は検出されなかった。

3 小 結

基礎第二研究棟の新営は既設の支障構造物の撤去跡地に計画されていることから、今回の調査面積は現状変更を伴う約1300㎡のうち空闲地に設定したわずかに約10㎡のトレンチであった。出土遺物も近世の陶器片若干が出土したのみで、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

しかし、同キャンパス各地域における調査で出土した遺物は時期、包含する土層の内容および堆積状況から、周辺地域からの流入品と考えることが最も妥当であるが、その出土量および残存状況はキャンパス中央部に近接するほど良好な状況にある。したがって臨床講義棟、図書館および基礎第二研究棟を含むキャンパス南部地域には埋蔵文化財が埋存する可能性は薄く、ボーリング・データおよび予想される旧地形等から、後世に大規模な地形改変が行なわれていなければ、キャンパス中央部の高所にこれらをもたらした遺構が残存する可能性が高い、その意味からも今後はキャンパスを東西に貫く市道以西の地域ではキャンパス中央部を中心とした地域を重点的に調査する必要性がある。

(河 村)



(1) トレンチ全景(南から)



(2) 北壁土層断面(南から)